

清枕装束撮要抄

914.3
Sc

60785

914.13
se



清少納言枕草紙装束撮要抄目録



襦ナツレの直衣ナツレ事

附同—下装、持衣細目事

フタフキ
二藍フタフキ乃事

香カのうきもカ事

弁ハれハ花ハの衣ハ事 附柳ハの衣ハ事

二三位乃袍ハとハ事ハかハれハ葉ハとハ事ハ

六位ハ乃ハ衣ハ事ハ

附言白振ハ類塵山ハ鳩色ハ莫ハ凌ハ
の号又ハ衣ハ振ハ保ハ此ハ清ハ袍ハ事ハ

ハ浦ハ菊ハ深ハ事ハ



あひひむそひのみ

皆練火色アハ子リこま

ひのさうそくれ事

附このめさうそくれ事

古今冠カウさだら事

細長汗アサヒ袂アサヒかろアサヒさぬうへの衣大口アサヒをアサヒぬアサヒ指アサヒ質アサヒの事

まこ巻マコマキの事

草帯クサオビこまコマ 附布袴ホウコ褌フクロちの比ヒ事コト靴カウジせセまマくる事

裾ス袴ハカマ領ネ中ナカ乃ノ事

けいケイいイくク川の事

清少納言枕草紙装束撮要抄

△清凉殿のせうそれをこといへる候

かうらん乃もまよまきカウ襦ユの太タあアるルまマへヘくク振フ

乃ノいイらラくクかカまマーーろロこコえエるルおオみミんンまマりリはハるル

といトイはハほホくクこコいイれレはハうウ履フキんンかカるルまマとト

まマくクこコほホきキこコほホるルふフきキつツるル大オホ納ノ之ノ殿ノ振フの

かカいイーーまマこコいイあアうウうウほホろロめメこコいイせセおオれレ松マツ

ねネさサこコあアろロこコほホろロこコいイはハまマあアらラあアやヤのノいイと

あアさサやヤあアらラつツこコいイまマじジりリあアらラあアらラ

義按

○裾の直衣ハ表白裏蒲萄エヒあるものある紫
此々シぬさシほシほシほシといひつ、帯シらシこれ
めく表シのいろシのつシろシろシこれシ
これ蒲萄シあシむシろシこれシいろシなる物シをシきシいシ
又一説ハ表白裏赤シ花シこシもシみシしシりシこシろシ
ろ直衣シよシのシ兒シろシ色シろシと下シ襲シにもシ狩シ衣シ
又ハ細長シめシとシちシゆシいシ羽シなり

△を兒シあシ一シ方シつシひシこシもシれシいシへシるシ候

二あシおシ急シひシそシめシかシと

唐シのシ言シハ
負シ鈔シ曰シ二シはシ藍シイシアシ

義按

○二あシわシろシ赤シ花シ及シ青シ花シとシりシてシ深シくシみシるシり
そシきシ赤シ花シとシハシ赤シ藍シこシ青シ花シとシあシとシ藍シ花シ
いシふシあシよシ二シあシわシいシふシなるシるシ一シ或シ人シ曰シ
赤シ藍シちシ青シ藍シこシ是シ和シ削シくシきシるシあシおシよシあシろシ
ちシ青シ藍シれシ免シくシきシるシ削シなりシといシへシりシをシ免シ
屋シうシひシとシらシありシこシ

△小シろシかシとシいシふシあシちシ小シ一シ条シのシ大シ柄シのシ
れシ市シ家シをシうシ一シとシいシふシ候

香シのシうシをシとシれシぬシこシあシおシれシあシ細シ一シかシるシ一シいシ

或人云クシカシノシ及シカシト
イシヘシリシ但シクシレシアシ井シ
云トキハシ友シノシコトシニ
ヨシラシスシ轉シ語シナシリ

わらここすまのほ袴又まりしる香袴ら
ひくぬいあやうなると若ぬひく

○^{義梅}香乃うももれを夏のさぬまへーそま

香いろち下格^{シツパキ}袴^{ハカマ}紅みーく夏と海と事

織うー~~夏~~装束^{シツパキ}あえくしり又或人曰

香文ハ考れたさ志こり名りーうりー

名こ上乃候心こさぬす物ーくろあま

け^{化粧}こりーく考又志こり衣さるる

りーくー~~只~~考又ーく考あく

丑集 辰巳四年二月十
四日 癸酉晴 入夜 仲春
入道 末談 古事 智度
殿 仰著 直衣 以 丁子 添
タル 香 惟 著 之

染しろハハゆ々思事なりこいり又こら
舊言此古袴ハ指費の下袴なる

△木の苑ハといへ候

まつり~~花~~久へさ~~お~~舞~~子~~舞~~子~~、ほり~~を~~こ~~あ~~や~~し~~の
家も~~が~~ろ~~な~~ら~~か~~さ~~の~~あ~~ら~~ふ~~し~~志~~ら~~う~~候~~
ら~~こ~~も~~た~~り~~き~~禮~~言~~い~~ら~~の~~こ~~ん~~と~~志~~務~~こ
え~~ん~~こ~~も~~つ~~さ~~ら~~あ~~ら~~ら~~を~~か~~ら~~り~~
こ~~ら~~ひ~~く~~い~~し~~かり

○^{義梅}此候弁乃まふれ衣まうく家詞あれお家は

こまり 弁花の衣 表白裏黒あり、左
あきまはくへみ白き草かきといひつ、
けらく下乃候る物いへる所、所の衣
の喜いろあるかきとさし死をりひさ
りきころは卵花まふの垣根ちうかほし
く郭にも花よりれぬへうかほといへる
に同一心あり 又表白裏黒なりと柳の衣
花いひくナナリうら二月まくとと
もち由他柳のさぬれ時方柳と織物あり



卵のまふれ時方う花と織物ありとこの
衣とこりへと或抄よみころり

△本巻といへる候

さうくあといふもの海くこやうも若
中あといへけととて二位二位のうへは
さぬそむるとりさうとと紫とさふひとの
んらり記

○^{美梅}衣ハカマ分よ一位ハカマ深紫衣三位以上ハカマ浅紫衣と見
るころり 花とと世作り 紫よあころりゆへ

ふろくりの紫とせんくそせりて
そめきとどゆしきめて深きみやふれ有
割のあつさりぬきふりかひんへあを
んりしきり

△ちてこれものしつへ

六位の藤人そそぢちくそこれいらき
つを逢あれもえりそあいぢあや織持
とふよほつそくそそりきいろすこあとい
しりくそ

○^{義按}いろちき白の櫛ツルビとく略名ありくも

鞠塵乃別名こそれ鞠塵禮此名を禮記の月

令此注よ出たり又延喜縫殿寮式よき白櫛ツルビ

と載られしるちき也又山鳩色眞陵龍或本とい

へ記を此さぬのちこ或人曰眞陵とい

天皇此清料といへりちか落ありしきり

さふれうし名目まへさうしきや又眞陵の字

と用りみや品眞陵といひく心ゆるぬ縁こ

名目よつらく文字とりゆる事例あり畢

熟線緩紙織部司共
はるす諸勤縮線緩紙
とあそだり活て可
紙ツルビ
熟紙紙書末部有共
後世宿紙と書し上と同ん

竟山鳩はこゝる後死すいへるち古き俗名目
ちるへし又飾は鞠麿は極深同物の
やうに載りきつるを甚あやまりこひとせ
野々卿と必あつとと論しく後二條用白
紙江守雲圖抄ホラ下ととく一物ありあ
る事とありあつとと一はあま祢く人
の志きつと彼卿を我も盛ありしと
あれははのりくうし事と論しく
不具とだらした事とと中しは史書撰

條々終に以事 天子は正服ごとく 上皇こ
しとも着清の例あり故も天皇の服清よ
位色とあり是く拵麿を 天皇襲の清袍
るり所は極指とせ紙ト下ととととと
用ありあつとととととととととととと
いふとととととととととととととととと
ちととととと侍中群要ふととととととと
ととととととととととととととととととと
新しきはくも終りととととととととととと

依名目替文字之類

○熟線綾 延喜織部司式

裝束諸抄縮線綾窓トアル是ナリ
清テ可讀メナリ

○熟紙 延喜式部省式

後世宿紙ト書ス上ト同心

上皇皇太子ちもさうり新王に侍る位らと
野代新幸の時あへく夏用古例多し

△を色さへあるやせしことつは

一の人此由ありうアスカ春日まうて急い際の織
そのとく紫なるかにもくわてく
くそあれをかもいしとかことひくさるの記
此中よいかまいをさうすくめくさいろ
あやてく

○義按衣服令義解云蒲萄者紫色之最淺者也と云

うり又織蒲萄ハ經赤緯紫なり故に紫なる
所くうりかきほもさくいひつ、けらら
るれう又不修あけうきつるのうへ
あろらひく、さひつさうかとい記ハ
奇妙れ又摺ともあり又下籠衣あく表裏
かけく急いそわといつら表裏さう表
花田あるとしり或急いそわのうへぬ表
或裏急い深又急いそわの織物あへ一色
くくつとさうとさうあへく

△小志のこゝんところ外にわくよめいひ
おとととつる候

小志おとつるあつひとれこけつるよきと
むもまやつりさ福この中ねうと
ほくろつとあつを

あつりのあつ山王監心つり

いっつりひものつりあつるん

こいひく清久御が小志おまかつりく

いっつりつりあつるむもつりあつる

つりつりつり又清久御が小志おまかつり

○義按そまあつひとハ小志の右れもつり

このつり延喜式踐祚太
掌會曰小齋親王以下皆

青摺袍五位以上紅垂紐浅深
相副とみまつり

紅とほ世穂芳の濃コナ
ウスキとふるむもひあ

て用ひつり又清久御が納まつり

なるこはゆるひくも又とけぬとつり

ろめいつり甚あつ、清あり 桃華桃華
草書とつり

松の松目れ扇のとつりあつるあまうとあ

儀を相書云むつりつり
あつるつりつりつり
つりつりつりつり
つりつりつりつり
つりつりつりつり

いむきひめくくいへる事ありあまきよ
と海ひくいとおもしうきさたうりにと
はるんし

△細方刀の予緒つきくさうけあつおのれ
とくくくくといふまぢうくとくは

行事の爲人れいけりかそのもれうこ
くくさうりにえゆ

○義按搔練後、禰念院、用白装束抄曰搔練カイチリ下装、火色、
下装各別物也、古有赤色くする人存、同物く由

秋書再略御門府
風俗可云
多々良女乃花乃
加以称利好年夜
減茶色好年夜

宛是不一然云、同抄曰御無智秘抄曰火のいろ
下重々いけりこかきりくもの之火れ
とことい裏ひくくもみおとのそ中ナカ室と
火文の中言ひお抄と入る備はま
入るくこい初りとい共うくおれをうた
取めくふくたれことみくさり

△淑景舎志けいあやまきままつりまふ程の事あり

いへる候

せもきえんよあそだひの清くくく下
くきなまひさちくさ終り

義按

○ひのさうそくといふ帯乃る宿衣直衣
と對しと畫れ装束といふるやむく
由ゆるなくく宿衣直衣めてち 主上
乃ちまへ、出結し結く事也宿衣とい
衣冠の事し宿衣直衣このおさうそく
こく晴よ、あうそくひんさうそくれ事
ゆりく説可きともすく小下かさ格を
ひさちとさきしりこ可きはきしり
東帯といふこえしり

△口部 ぎよえゆる物といへば

○^和のつとくぬが日ちいさう馬母のりてお近
あう人ねかうやうしひを袍ウキマも下かさ
むと例なたりたるいっお目ひしん

義按

○いふるやうととも今の世はかうり
なうはひきまきいみへとせし
ならとあししんしあふあけしり

△冠の清しとくそく目なるあやう

あり物とあうそくはみくし

いろは

いゝおろすろおろ名もつけきんい
あやーいぬのあゝ海そかきこいひつ
あーあそかきみそりあどいへーの
らういのらやうかそくういぬいへー
らぬとこそあそれとそれともろい
の人ねさるこのあきいへーのらぬれそく
いへー下らぬもろー又たかくちあ
こりりくらひろれあそいへーあちん

あーいへーあそいへーあそいへーあ

あーのあーあそいへーあそいへー

○^{兼按}細長あがりいぬのくひいぬやうよき

こもこりのあこいへーあそいへーあ
こいへーあそいへーあそいへーあ

細長あそいへーこのあそいへーあ

こり又かこみ下れあそいへーあ

あそいへーあそいへーあそいへーあ

上れ^{ツツ}あそいへーあそいへーあ

1 後のうさこ崩は、こころいふといふうさ
かさみおつくまりひきてといひりて
もくろくえんちありあつといへりし
なまなり新集集巻富くすもどろ人
何そふありて乙女子かさみのすうれあつ
せそくといひてり雅をきむはむ抄はる
のひかり裁縫すてまわつくまきり
又うさね下の候うさねといふあり
ありらぬ名ひそめとらはらくまを
とる

うといろの歌しみるり藤原秘伝抄は上胎不
謂是非三位典侍号上胎着赤青色候御陪
膳也とんくとも是く雅をきむはむ抄曰上胎
の女居れいろとゆるといふありいろ赤い
れありものかきさね地よりれまるとま
ありといふはるはむ武部の日記もあ
くみといひされといふ書のこめといひ
いありく源氏といふといふは釋まくと
ひたりさうこ和名抄は北月子とまると和名

かゝらぬと川一形如す臂、至腰襖之袷、衣
ありこゝろと有り、而ともてゑるそかゝ衣ハ
みーつらきぬとこそいさぬといへる成へ
又うへの衣、初名おと袍、和名うへのきぬ、一朝、
帳とみ、つり、又下かき、ひとち、一は名目
またくひ、おく、うへの、きぬ、下つ、こ福、あと、とを
あり、下の、ほち、こき、ぬと、いへる、あと、きハ
ほ、一か、いぬ、りか、きぬ、を、いへる、かき、ひる、川ハ
つ、あお、きつ、こき、ひと、みつ、り、又、大口

かゝらぬと川一形如す臂、至腰襖之袷、衣
ありこゝろと有り、而ともてゑるそかゝ衣ハ
みーつらきぬとこそいさぬといへる成へ
又うへの衣、初名おと袍、和名うへのきぬ、一朝、
帳とみ、つり、又下かき、ひとち、一は名目
またくひ、おく、うへの、きぬ、下つ、こ福、あと、とを
あり、下の、ほち、こき、ぬと、いへる、あと、きハ
ほ、一か、いぬ、りか、きぬ、を、いへる、かき、ひる、川ハ
つ、あお、きつ、こき、ひと、みつ、り、又、大口
かゝらぬと川一形如す臂、至腰襖之袷、衣
ありこゝろと有り、而ともてゑるそかゝ衣ハ
みーつらきぬとこそいさぬといへる成へ
又うへの衣、初名おと袍、和名うへのきぬ、一朝、
帳とみ、つり、又下かき、ひとち、一は名目
またくひ、おく、うへの、きぬ、下つ、こ福、あと、とを
あり、下の、ほち、こき、ぬと、いへる、あと、きハ
ほ、一か、いぬ、りか、きぬ、を、いへる、かき、ひる、川ハ
つ、あお、きつ、こき、ひと、みつ、り、又、大口
かゝらぬと川一形如す臂、至腰襖之袷、衣
ありこゝろと有り、而ともてゑるそかゝ衣ハ
みーつらきぬとこそいさぬといへる成へ
又うへの衣、初名おと袍、和名うへのきぬ、一朝、
帳とみ、つり、又下かき、ひとち、一は名目
またくひ、おく、うへの、きぬ、下つ、こ福、あと、とを
あり、下の、ほち、こき、ぬと、いへる、あと、きハ
ほ、一か、いぬ、りか、きぬ、を、いへる、かき、ひる、川ハ
つ、あお、きつ、こき、ひと、みつ、り、又、大口

より夏印のい流しうらまは新りいり
とりあまや

△うら夏まー死ものといふは

女の流かさうきくあまよはあまうきうき
まこあまうら

○美梅

川をあしうらとひひうあけうらう男志

赤帯こまふう一羽のこ用れおとまこ
あまといりまかんくまをなんく
友よあけうら

△雪うら海くこりふは

又位こ位もさうけりうあやうあう上
のさねれまいしうらうおくかそのあひれ
うらうさうとこのあまこめひらまこま
てむらさねのけらあまもあまうらこ
さほりうらとさくあこあは紅あまを
あくーさ山あま成出くかうらま
ーさうふ風のうらうあまこまあま
吹っくれはまうらうあまあめこら

有^レ名^ナ抄^シ曰^ク金^ノ起^リ帶^ト唐^ノ
 函^ノ海^ノ今^ノ云^ク左^ニ右^ニ金^ノ五^ノ天^ノ
 將軍^ノ各^ノ一^ノ人^ノ紫^ノ補^ノ福^ノ
 金^ノ起^リ帶^ト
 後^ニ井^ノ條^ノ開^キ自^ラ記^ス實^ニ始^メ
 七年^ノ三月^ノ七日^ノ丁^ノ酉^ノ霜^ノ
 降^リ晴^ク卯^ノ特^ニ裝^ル東^ノ辰^ノ尅^ノ
 悉^ク六^ノ條^ノ院^ノ予^レ櫻^ノ前^ノ木^ノ
 下^ニ重^ク緝^ル地^ノ平^ク緒^ノ螺^ノ鈿^ノ
 劍^ノ鑿^ル物^ノ德^ノ文^ノ帶^ト云^ク

ふくく川をうくいあふれさいほくゆさ乃
 いと白くかアさろくそやうーと終

〇義按かそれ帯のうつさろくとい有文の帯と

方しより 腰帶類初名抄曰唐衣服令云革帶玉鈎

注云今按革帶以其所附金玉石角等為名有

白玉帶、隱文帶、馬腦帶、波斯馬腦帶、紀伊石帶

出雲石帶、越石帶、斑犀帶、烏犀帶、散豆帶等其

體有純方九鞞擲上等之名革帶是其惣名也

とんまより又このかきろふひさをもたふと

てむくさねれうーぬさとい是布袴といふ

びろへー雅をけ装束抄アわうこの事

さぬさーぬさうねりくまうさうへ

あいさ福さくう屋のさわみありはく

かくみひさー事カクとま川ありとみ

くり又あこわのぬあをさろくーと

山吹と出くーは是紅花少ひく昔いろ

丹心あるといへるや下乃候ひくハといへる

西もさ貴をみよりむくあーさろくハん

唐字
 字彙曰襦短衣也
 同音襦字肥同
 同音襦日所常
 著衣也

つさあーといへる同ー又寶物集の細の意
 乃後のいゝるれをけていゝらると成るうま
 ーれと右大守報宗のふめらるゝを何こめ
 とハ志隆の略訓はるるー正式をぬるゝ衣
 たりちやけもて或もゝと或唐色あつち
 深あこ先とーりあこめ字好喜式よハ單
 襦^{アヲ}衿^{アヲ}襦とみゝりーそが裳字法抄多ハ衿^{アヲ}
 乃字とちらひ或ち衿^{アヲ}字と用ひらゝ文字
 乃てろよられハ好喜式可なりんゝ行らるゝ

乃ー又あつち、もろくハあつちさハちて
 雪のいゝ白くゝアゝらゝあれハ好^{アヲ}靴^{アヲ}
 若れゝささくめや騎馬のこゝあつてハ
 用ひらるゝよおほゝらゝのてあゝり
 あけらゝり

△清経乃ゝよあまゝつゝせおまゝさん
 ーとこゝんゝ候

菊女ハ人馬よのそくひら出やりまゝすゝこ
 の裳々ゝいひまかゝの風ゝ吹やれらゝ

いとけりーがせんしつうひちいふと
ちまうちまう人ありえびそめれあり物の
わさとしさるはそちけさるさゆりささり

からし

義按 裙帯タイは肩よりけ、領中項の頂の倍さる

或祀よみさり今の世もいりごとさて

かさを思たると又女乃さるわさる事ハ

是馬よのれそ也いあさるナインヒマダ掌侍令婦と

つよよれさる例あり又あけあいろゆるさ

裙帯非抄女禮服
上畧其裙帯紫縁
半合如帳紐雨端
経形不用簪用素
是位駭也義按衣腹
合云紕帶是也乎
領中 延喜繪殿寮
式中官春季篇云
領中四條材紕三尺
六寸條別
九尺
居常考領中 日本記 非記
云比礼 婦人項上鎧也
・官彙項頭後

さしめさるしハ延喜繪正式ハ婦人得看夫衣
服色しいろ下るこてさあ女をさるるいほの
織物れさるめさるさるとたささていへる
りや

△上乃ほまつりの法いへる中み

けいーさるあれとすけさる末緒とささか

ともくさいさ

義按 けいーさるハ殺子とくけア和名抄皆の

部山槐記ホにさみしよりあれい添ぬり

乃あしとせしむるや古きかた茂はつりの圖
もそとより枝ありきといへる後申言さけ
いどそへもさされいなるもあれぬく
ふくここえより異邦のおりる晋文公
の臣介之推事ふも終り此一節を
上乃はれ文あれい發陽もかくへささ
うあさる勢向ち衣服のさそと筆とそ
先く其余のこしハ略しころふ或人此後
を明るはりりてさのられと又

たよりさるき記乃こ

篤好者學之必博博學之難之
天朝舊章世代轉移方其什以錄
朝中搢紳多不曉况於布衣人
子臺井氏義初志為古禮為權概
者且人之多聞古之精事涉典好
子自抄書辨正滋深供人知多此

迷多或能帖中
清氏早子拙出
老早少四西珍
听多年成之能
正德年二月
藤氏書

右書字之了

速水后常中

右之書速水先生以本書寫之予
不可他見者也

寶曆五乙亥年秋九月下旬一頭有親



